「音韻学」の語誌
——音韻の研究を表す語について——

阿久津　智

○　まとめ

「音韻」（漢字音）に関する研究は、中国では、当初（南北朝・隋代以降）、そのまま「音韻」と呼ばれたが、やがて、「音韻之学」という言い方ができ、「音韻」とともに使われるようになった。

この両者は、日本に伝わり（前者は平安時代、後者は室町時代か）、江戸時代に、「音韻」が、「漢字音」だけでなく、（日本語音を中心に）広く言語の音の意味でも使われるようになると、「音韻之学」（「音韻の学」、「音韻ノ学」）も、広く言語の音の研究の意味でも使われるようになった。

明治になると、「音韻の学」は「音韻学」となり、従来の用法のほかに、西洋の phonetics（自然科学的な立場からの言語音の研究）の訳語としても（「発音学」、「声音学」、「音声学」などとともに）用いられるようになった。やがて、昭和初期に、phonetics の訳語が「音声学」に収束すると、「音韻学」は、西洋に新しく起こった phonology（機能的な立場からの言語音の研究）の訳語として（「音韻論」とともに）用いられるようになるが、その後、phonology の訳語が「音韻論」に定着したことによって、「音韻学」は、ほぼ本来の漢字音の研究を表す用語に戻った。

一方、中国では、日本よりも遅れて、一九二〇年代に、「音韻之学」に代わり、「音韻学」が用いられるようになった。これは、phonology の訳語としても使われたが、後に、phonology の訳語としては、「音位学」や「音系学」のほうが一般的になり、今日では、「音韻学」は、主として、中国語音（漢字音）の歴史的な研究について用いられている。

筆者は、先に、「音韻」、「音韻論」、「音声学」などの語誌について発表しているが（阿久津二〇一七・二〇一八）、本稿では、これらを踏まえて、「音韻学」の語誌を中心に、音韻の研究を表す語に

ついて、見ていくことにする。

一　はじめに

「音韻学」という語は、日常的に使われる、一般的な語ではない。「音韻学」は、小型の学習国語辞典には、見出し語として立項されていないが（「音韻」の子見出しにもなっていない）、中型の国語辞典には、次のように載っている。

① 中国の文献資料を基に漢字音を分析する学問。

② 「音韻論」に同じ。

（『大辞林 第三版』「音韻学」三省堂　二〇〇六）

① 中国語の漢字音に関する学問。

② 広く言語音を研究する学問。

（『大辞泉 第二版』「音韻学」小学館　二〇一二）

① 音韻1〔中国語で漢字の音を構成する声母や韻母などの総称〕に関して中国で発達した学問。また、日本で漢字の音に関する学問。

② 音韻論に同じ。

（『広辞苑 第七版』「音韻学」（「音韻」の小見出し）岩波書店二〇一八）（〔〕内は筆者による。以下同じ）

これらの語釈に見られるように、「音韻学」は、言語研究の分野における専門語といえるが、言語学や日本語学では、広く「音韻」（抽象的・機能的にとらえた言語音）に関する研究領域は「音韻論」と呼ばれ、「音韻学」は、「音韻」に関連する研究分野の中でも、特に「漢字音」（中国語音）に関する研究に限って使われることが多いようである。

以上は、今日の日本語における「音韻学」の（辞書的な）意味であるが、本稿では、「音韻学」という語が歴史的にどう使われてきたのかについて見ていきたい。具体的には、（一）「音韻学」という語は、いつごろから使われるようになったのか、（二）「音韻学」という語は、どのような意味で使われてきたのか、（三）「音韻学」と（ほぼ）同様の概念を表す語には、どのようなものがあったのか、について見ていく。

二　「音韻学」はいつごろから使われるようになったのか

まず、現代における最大規模の国語辞典である『日本国語大辞典 第二版』（小学館 二〇〇〇～〇二。以下、『日本国語大』）における、「音韻学」の意味、および初出例を見ておく。

① 中国語の漢字音に関する学問。

② （広く）言語音を研究する学問。

＊国語のため［1895］〈上田万年〉国語研究に就て「しかし其音韻学などに至りましては、今日うけた生理学上、心理学上、言語学上の経験は、まるで其改革を要する事ゆゑ」

（網かけは筆者による。以下同じ）

同辞典は、「語義説明は、ほぼ時代を追って記述し、その実際の使用例を、書名とその成立年または刊行年とともに示す」（「凡例」）方針をとっており、右の二つの意味のうち、①をより古い意味と認めていると思われるが、これには、用例が挙げられておらず、いつごろから①の意味で「音韻学」という語が使われるようになったのかははっきりしない。一方、②については、一八九五年頃には使われていたことがわかる。

右の①については、その意味からして、中国語に「音韻学」という語があり、それが日本語に取り入れられたということが考えられる。そこで、中国語における「音韻学」について、最大規模の中国語辞典である『漢語大詞典』（上海辞書出版社　一九八六～九四）から、「音韻学」の意味、および用例を見てみる（漢字の字体や、句読点・括弧類などは、現代日本語で通用しているものに変えて示す。訓読・日本語訳は筆者による。以下同じ）。

語言学的一個部門、研究語音結構和語音演変。也叫声韻学。〔言語学の一部門で、言語音の構造や、言語音の史的変遷を研究する。「声韻学」ともいう。〕

宋　沈括『夢渓筆談』〔一一世紀〕（芸文一）「音韻之学、自沈約為四声、及天竺梵学入中国、其術漸密。」〔「音韻之学」、（南朝・梁の）沈約、四声を為（つく）りてより、天竺の梵学が中国に入るに及び、其の術、漸く密なり。〕

清　皮錫瑞『経学歴史』〔一九〇七刊〕（経学復盛時代）「小学兼声音故訓、宋呉棫・明陳第講求古音、猶多疏失。顧炎武『音学五書』、始返於古、江（江永）・戴（戴震）・段（段玉裁）・孔（孔広森）益加闡明。是為音韻之学。」〔小学は声音・故訓を兼ぬ。宋の呉棫、明の陳第、古音を講求すれども、猶、疏失多きがごとし。（明末・清初の）顧炎武の『音学五書』、始めて古に返り、（清の）江永・戴震・段玉裁・孔広森、益々闡明を加う。是れ「音韻之学」たり。〕

羅常培『漢語音韻学導論』〔一九四九初刊〕（緒論）「漢語音韻学即弁析漢字声・韻・調之発音及類別、並推迹其古今流変者也。」〔「漢語音韻学」は、即ち、漢字の声（声母）・韻（韻母）・調（声調）の発音及び類別を弁析し、並びに其の古今の流変を推迹する者なり。〕

『漢語大詞典』に挙げられている三つの用例のうち、前の二つは、「音韻学」ではなく、「音韻之学」の用例である。これは、中国語では、「音韻之学」と「音韻学」とが同じものとして扱われることを示すものかと思われるが、ここでは、両者を分けて扱いたい。その場合、同辞典の用例を見る限りでは、中国語において「音韻学」が使われ始めたのは二〇世紀に入ってからのこと（『日本国語大』にある上田万年の著作に見られる例のほうが古い）、ということになる。

ところで、同辞典では、「音韻学」の語釈に、「中国語における」

という限定はないが、挙げられている用例は、すべて中国語に関するものである。ほかの大辞典、専門辞典類には、「音韻学」の語釈に、「漢字」、「中国」、「漢語」、「字音」などが使われているものが多く、中国語における「音韻学」は、主として、中国語音（漢字音）に関する（歴史的）研究を指す（『日本国語大』の「音韻学」①に当たる）ものと思われる。

亦称声韻学或韻学。弁析漢字声・韻・調的発音和類別、並研究其古今流変的専門之学。〔以下略〕〔「声韻学」や「韻学」とも称する。「漢字」の声母・韻母・声調の発音と類別とを分析し、また、その古今の変遷を研究する専門的な学問。（以下略）〕

（『辞源　第三版』「音韻学」商務印書館　二〇一五）

中国伝統語言学的一個分支、研究漢字声・韻・調的類別及古今演化軌迹、並弁析語音的発生過程。〔以下略〕〔「中国」の伝統的な言語学の一分野で、「漢字」の声母・韻母・声調の類別と、古今の変遷の軌跡とを研究し、また、言語音の発生過程を分析する。（以下略）〕

（『伝統語言学辞典　第二版』「音韻学」河北教育出版社　二〇一〇）

也叫「声韻学」。研究漢語語音系統的沿革、注重弁析字音結構中的声・韻・調三種要素、並研究其不同歴史時期的分合異同。〔以下略〕〔「声韻学」ともいう。「漢語」（中国語）の言語音系統の沿革を研究する。「字音」の構造における声母・韻母・声調の三種の要素の分析を重視し、また、それらの、異なる歴史的時期における分合・異同を研究する。（以下略）〕

（『語言学辞典　増訂版』「音韻学」三民書局　二〇〇五）

二・一　「音韻之学」

ここで、しばらく「音韻之学」について見ておきたい。「音韻之学」という言い方は、『漢語大詞典』にあるように、沈括の『夢渓筆談』（一一世紀）に現れたものが古い用例のようである。同書「芸文二」には、「大都自沈約為四声、音韻愈密。」〔大都（おおむね）、沈約、四声を為りてより、「音韻」愈々密なり。」（本文は「中国哲学書電子化計劃」による）などという用例もあり、この「音韻」は「音韻之学」と同じ意味で使われている。もともと「音韻」には、《音韻（漢字音）の研究》を表す用法があり、「音韻之学」という言い方が出てきた後も、この意味の「音韻」は使われている。これは、「音韻」の原義である《音楽的に調和した美しい音》から、《ことばや声の響き》→《詩のリズムや韻律》→《漢字音》→《漢字音の研究》というように、意味・用法が変遷・拡大したものと思われる（阿久津二〇一七：二〇〇）。以下に、中国と日本の文献における、《音韻（漢字音）の研究》を表す「音韻」の例と、「音韻之学」（「音韻の学」、「音韻ノ学」を含む）の例とを、いくつか挙げておく（以下、用例は、書籍・雑誌類のほか、「中国哲学書電子化計劃」（『四庫全書』

等）、「漢籍電子文献資料庫」、「ジャパンナレッジ」（『群書類従』、『東洋文庫』等）、「国立国会図書館デジタルコレクション」、「国文学研究資料館　電子資料館」、「早稲田大学図書館　古典籍総合データベース」、「ヨミダス歴史館」（読売新聞記事データベース）、「毎索」（毎日新聞社のデータベース）などによって求めた。なお、「音韻」と「音韵」とは、「音韻」に統一する。また、明治までの刊行物については、発行元を省略する）。

「音韻」の例

(1)孫叔言（ママ）創爾雅音義、是漢末人独知反語、至魏世此事大行。〔中略〕自茲厥後、音韻鋒出、各有土風、遽相非笑、指馬之諭、未知孰是。〔孫叔然（孫炎）、『爾雅音義』を創る。是れ漢末の人にして、独り反語（反切）を知る。魏の世に至り、此の事、大いに行わる。（中略）茲より厥の後、「音韻」鋒に出で、各々土風有り、遽に相非笑（非難嘲笑）し、指馬（指鹿為馬）の諭の、未だ孰か是なるを知らず。〕

（顔之推『顔氏家訓』巻下「音辞篇」六〇〇頃）

(2)其他若天文・地理・典章・制度・食貨・刑法・字学・音韻・医経・術数之説、亦靡不該貫、旁而釈・老之言、亦洞究其蘊。〔（許謙は）其の他、天文・地理・典章・制度・食貨・刑法・字学・「音韻」・医経・術数の説の若きも亦た、貫くに該らざるものなく、旁にして、釈（釈迦）・老（老子）の言も亦た、其の蘊を洞究す。〕

（宋濂等撰『元史』巻一八九「列伝第七六　許謙」一三七〇）

(3)且古音・今音、既有開・合・洪・細之不同、復有清・濁・陰・陽之互異、非深通音韻之人、難得要領。〔且つ古音（上古音）・今音（中古音）、既に開（非円唇音）・合（円唇音）・洪（非口蓋化音）・細（口蓋化音）の不同有り、復、清・濁・陰（清音の声調）・陽（濁音の声調）の互異有り、深く「音韻」に通ずるにあらざる人、要領を得難し。〕

（廖立勛編、黎錦熙訂正『実用国音学』商務印書館　一九二〇：二）

(4)即令三学生四百人ヲシテ習ハ五経三史。明法算術。音韻籀篆等ノ六道ヲ一。

（三善清行『意見十二箇条』九一四）

「音韻之学」の例

(5)孫炎始作字音於是有音韻之学。〔孫炎、始めて字音（『爾雅音義』）を作る。是において「音韻之学」有り。〕

（王応麟編『玉海』巻四四「芸文　小学上」一三世紀）

（同書には「音韻之学」の意の「音韻」も見える）

(6)其能与隣邦並駕斉駆者、全仗音韻之学、就如周饒国能為機巧、以飛車為不伝之秘、都是一意。〔其の能く隣邦と並駕斉駆する者は、全く「音韻之学」に仗る。就ち、周饒国の能く機巧を為り、飛車を以て不伝の秘と為すが如く、都是れ一意なり。〕

（李汝珍『鏡花縁』第二八回　一八一八）

（同書には「音韻之学」の意の「音韻」も見える）

(7)右反切ノ大道者。声明ノ根本也。音韻ノ学業之述作ノ軌範也。

（志玉照珍『反音抄』「反音大意事」一四〇八）

(8)音韻の学は十行五位の音韻の図を以て本とすべし

（鴨東蘇父『仮名文字使　蜆縮涼鼓集』上「凡例」一六九五刊）

(9)西方諸国の如きは。方俗音韻の学を尚びて。其文字の如きは尚ぶ所にはあらず。

（新井白石『東雅』「一　総論」一七一七）

(10)国朝文治大ニ興テ而音韻之学悉復ンコトヲ二古規ニ一聊カ輯メ二於諸説ヲ一標二註シテ之韻鑑〔韻鏡〕ニ一以テ欲ス二与レ衆共ニ知ント一

（叡竜『韻鑑古義標註』上「序」一七二六刊）

(11)天平の時に至り、右大臣吉備ノ朝臣音韻ノ学に長せし事、善相公の封事に見え、悉曇の伝は釈ノ円仁入唐して南天の宝月三蔵より得たる事、三代実録に見えたり。

（谷川士清『和訓栞』巻之一「大綱」一七七七刊）

（句読点は筆者による）

(12)上古、人種政治の単純なる際は、言語の混淆も極めて少なし。されば、別に音韻の学を修めずとも、自然に言語の法則に順ひ、或は詩を賦し、文を作り、以て能く其の思想感情を発露して、少しも誤謬を生ずる事なかりき。

（佐藤仁之助『速成応用　漢学捷径』一九一〇：八三）

(1)は、隋代の家訓書に見えるもので、「音韻」を《音韻（漢字音）の研究》の意で用いた最古の例と思われるものである。(2)は、明代に編纂された正史の列伝に見える例である。この例のように、学問知識（分野）を列挙する中に、その一つとして、「音韻」が挙げられているものは多い（(4)もそうである）。(3)は、中国近代の音声学の概論書に見える例である。(4)は、平安時代の政治意見書に見える例で、吉備真備のことを述べている。(5)は、南宋の類書に見えるもので、内容は(1)の記事によっている。(6)は、清代の伝奇小説からの例である。魯迅は、この作者の李汝珍について、「蓋惟精声韻之学而仍敢于変古、乃能居学者之列、博識多通而仍敢于為小説也。」〔蓋し、惟（これ）、声韻（音韻）の学に精しくして、仍（よ）って、敢えて古を変え、乃（すなわ）ち能く学者の列に居り、博識多通にして、仍って、敢えて小説を為（つく）るならん。〕と述べている（『中国小説史略　匯編』上海書店出版社　二〇一五：二九一（一九二三～二四初刊））。(7)は、室町時代の反切の解説書に見えるもので、「音韻ノ学業」の例であるが、ここに挙げておいた。(8)は、江戸時代の仮名遣い書に見える例で、日本語について述べているものである。(9)は、江戸時代の語源研究書に見える例で、西洋の言語について述べているものである。(10)は、江戸時代の、『韻鏡』（唐末～五代に成立したとされる韻図）に標注を加えた書に見えるものである。(11)は、江戸時代の辞書のもので、内容は(4)の記事によっている。(12)は、明治末の漢学・漢文の概説書に

見える例である。

「音韻之学」は、本来《漢字音の研究》のことであるが、⑻や⑼の例からわかるように、日本では、江戸時代には、漢字音以外の《言語の音の研究》の意味でも使われるようになっている。これは、「音韻」が、漢字音以外の《言語の音》の意味でも用いられるようになったことによる（阿久津二〇一七：一九三）。江戸時代には、《言語の音の研究》の意味では、漢字音、日本語の音、その他の言語の音を問わず、「音韻の学」がよく使われたようである。なお、釘貫（二〇〇七）は、「音韻之学」に関して、「わが国では phonology を知る遙か以前の近世初期から韻鏡注釈を柱とする漢字音研究を指して『音韻之学』とする伝統が存在した。」（五ページ）、「『音韻之学』は、当初の反切あるいは韻鏡の学問を指していたものが、まもなく仮名遣いの本質規定を通じて、五十音図を捉えた日本音韻学へと展開した。」（四三ページ）などと述べ、昭和初期の神保格や有坂秀世の「音韻」理論についても、「音韻之学」の伝統を継承するものであるとしている。

二・二　「音韻学」の使用の始まり

再び「音韻学」について見ていく。『日本国語大』によれば、「音韻学」②（「（広く）言語音を研究する学問」）の初出例は、上田万年の「国語研究に就て」（『国語のため』所収、一八九五：四八）に見えるものである。同論文には、「仮令ば本居〔宣長〕翁の様な人は、私共が尤も敬慕する先生ではありまするが、しかし其音韻学などに至りましては、今日うけた生理学上、心理学上、言語学上の経験は、まるで其改革を要する事ゆゑ、なんぼ後輩の私なぞでも最早此点では卑屈的に、翁の説には賛成いたしませぬ。」とあり、この「音韻学」は、「本居翁」の「音韻学」、つまり、（江戸時代における）日本語を主な対象にした音韻研究を指している。一方で、『国語のため』所収の別の論文には、「フォネティックス即ち音韻学の事」（「新国字論」二一八ページ）という用例も見られる。こちらの「音韻学」は、phonetics（音声学）の訳語だと思われる。

ほかに、これらとほぼ同時期（明治三〇年前後）の用例には、たとえば、次のようなものがある。

⒀音韻学とは、音義・発音等の原理より、父〔子音〕母音配合、子韻〔父音＋母音の音節〕を生ずる応用、濁音・音便・通音・延約・省略音・仮字用格を説き、

（大川真澄『普通教育　日本文典』一八九三：一）

（句読点は筆者による）

⒁聞く方今大学令の改正を行はれ、従て学科上も稍々面目を改むると、就て音韻学は之を小視すれば、一学科の小部分に過ぎざるが如しと雖、之を大視すれば、国語国文の原始にして生を我日本に受くる者一日一時も常用離るべからざるの学理也

（旗野十一良「国文科に音韻学の一科を加えることを請う建議」『読売新聞』一八九三年九月一二日）

⒂本朝音韻学の研究は亀山院、文永年中（一二六五年頃）に於て其端を開きしと云ふ、当時、南都転経院の律師某、韻鏡を唐本文庫中に得たり、

（猪狩幸之助『漢文典』一八九八：一一八）

⒃本邦音韻学ノ開ケザルニ当リテヤ、パピプペポヲ以テ、半濁音ト為シ、清濁相半バセル音ナリトセリキ。サレド、其イミジキ誤謬ナル事、固ヨリ、云フヲ待タズ。

（瓜生篤忠・瓜生喬『国文法詳解』一八九九：一七）

⒄音声は言語の材料であつて、音声と云ふ原料の上に、意味が宿つたのが、言語であると云ふ事が、知れゝば、発音学（また、発音学〔ママ〕、音韻学などとも云ふ）と言語学との区別は、更めて述べるまでも無く、充分明かだと思ふが、発音学の方は文字の示す通りに、吾々が言語を使ふ、其原料として発する音韻に就いて、其性質、構造等を取調べる科学に外ならぬのである。

（岡倉由三郎『発音学講話』一九〇一：六）

⒅三代〔夏殷周〕以前ニハ所謂音韻学無カリキ、蓋シ其必要無ケレハナリ、何トナレハ文字ハ言語音声ヲ写スノ機関タルニ過キサレハ、若シ言語ニシテ変遷ナク、音韻ニシテ異同ナカラシメンカ、奈何ソ文字ニ対シテ音韻何如ヲ問フモノアランヤ、

（児島献吉郎『漢文典』一九〇二：四一）

⒂と⒅とは、漢文典（漢文の文法書）に見られる例で、これらの「音韻学」は、《漢字音の研究》を指している。なお、⒂の内容は、『韻鑑古義標註　上』（⑽参照）の巻末の記事によっている。⒀と⒃とは、日本文典（日本語文法書）に見られる例で、日本語音について述べている（日本文典の体裁からいえば、この部分は英文典におけるorthography部門に当たる）。⒁は、新聞に掲載された「建議」であるが、これも日本語音に関するものである。⒄は、英語学者による「発音学」の概論であり、この「音韻学」（＝発音学）は、上田万年の「新国字論」と同様に、phonetics（音声学）の訳語である。

以上の「音韻学」のうち、『日本国語大』の「音韻学」①（「中国語の漢字音に関する学問」）に当たるものは⒂と⒅で、残りは「音韻学」②（「（広く）言語音を研究する学問」）に当たると思われる（出現時期は、①より、②のほうがやや早い）。ただし、後者については、大きく、江戸時代以来の音韻観に連なる日本語の音韻研究と、西洋由来のphoneticsに基づく音声研究とに二分される（上田万年の論文でいえば、「国語研究に就て」の「音韻学」は前者に、「新国字論」の「音韻学」は後者に当たる）。これらの用例から、「音韻学」は（①の意味でも、②の意味でも）、一八九〇年代には使われるようになっていたことがうかがえる。

「音韻学」①（「中国語の漢字音に関する学問」）については、さらに古い例が、明治初年に文部省が刊行した、榊原芳野編『文芸類纂』（一八七八）に見られる。

⑲沙門行智は梵音の口称を訛りしは、対訳漢字の謬音に因ることを発明し、悉曇字記新釈〔真釈〕を著はし、併せて国音をも正し、音韻学を盛に闡明せしを以て、今は其道を伝ふる者少しとせす

（榊原芳野編『文芸類纂』巻五「音博士」一八七八：二三オ）

また、森鷗外の史伝『伊沢蘭軒』（『東京日日新聞』、『大阪毎日新聞』に連載）の第五二回に、伊沢蘭軒（一七七七～一八二九）による、自作の詩に対する註、「先生〔高松南陵〕名文熈、字季績、於音韻学尤精究、釈文雄以来一人也」（ルビは、『東京日日新聞』一九一六年八月二〇日による）が引用されていて、ここに「音韻学」が見られる。これが蘭軒の記したとおりのものであれば（筆者は未確認）、「音韻学」（①）の最も古い使用例（一八〇七年頃か）になるかと思われる。

さて、先にも述べたが、中国の文献における「音韻学」の使用は、日本よりもさらに遅れるようである。『漢語大詞典』には、羅常培『漢語音韻学導論』（一九四九刊）の例が挙げられているが、もう少し早い時期のものとしては、一九三〇年代に、張世禄の、「中国音韻学史之鳥瞰」（『東方雑誌』二八―一一　一九三一）、『音韻学』（商務印書館　一九三三）、『中国音韻学史』（商務印書館　一九三八）などの著作に、（これらの題名にあるように）「音韻学」が使われている（阿久津二〇一八：五〇）。一九〇四年創刊の『東方雑誌』を見る限りでは、「音韻学」が使われるようになったのは、一九二〇年代に入ってからのことのようである。

⑳中外音韻学家的中音字母　他們用不着注音字母。注音字母止是他們極陋的参考品之一。〔国内外の「音韻学」家の中国語音字母　彼らは注音字母（一九一八年に公布された中国語の発音記号）を用いない。注音字母は、彼らの粗悪な参考品の一つにすぎない。〕

（呉稚暉（敬恒）「二百兆平民大問題最簡便的解決法」『東方雑誌』二一―二　一九二四：L二）

㉑他対於経学・史学・地理学・音韻学・金石学、都有極精審的著作。〔彼（顧炎武）は、経学・史学・地理学・「音韻学」・金石学に関して、いずれも精密で詳細な著作がある。〕

（梁啓超「明清之交　中国思想界及其代表人物」『東方雑誌』二一―三　一九二四：九〇）

㉑では、「音韻学」以外にも、学問分野名に「学」が付いており、このころ、中国語で「〇〇学」という言い方が使われるようになったことがうかがえる。この著者である梁啓超は、最も早い「漢訳書分類目録」である『西学書目表』（一八九六）において「漢訳西書」の「学類」名に「〇学」を用いており（坂出二〇一八：一九二）（日本では、西周が、一八七〇頃に、『百学連環』（講義、後に『西周全

集』に収録）で、西洋の学問領域に「○○学」という訳語を当てている）、一九二一年刊の『清代学術概論』において、「音韻学」という用語を使っている（ただし、「経学」や「史学」など、「○学」という二字（二音節語）のものは古くからあったようである）。

(22)其学問之中堅、則経学也、経学之附庸則小学。以次及於史学・天算学・地理学・音韻学・律呂学・金石学・校勘学・目録学・等等、一皆以此種研究精神治之。〔其の学問の中堅は、則ち経学なり。経学の附庸（補助学問）は則ち小学なり。以て次いで、史学・天算学・地理学・「音韻学」・律呂学（音楽）・金石学・校勘学・目録学等等に及ぶ。一に皆此の種の研究精神を以て之を治む。〕

（梁啓超『清代学術概論』水牛出版社　一九七一：七八　（一九二一初刊））

一方、一九一〇年代の『東方雑誌』の記事には、「音韻之学」は見られるが、「音韻学」は見られない。

(23)音韻之学。関於国語研究之前途甚鉅。今日欲謀言文之一致。求国語教授之改良。〔中略〕至音韻学説及実行方法。則非経二三年之歳月。以理論実験双方並求不可。〔「音韻之学」。国語研究の前途に関しては、甚だ鉅（かた）く、今日、言文の一致を謀り、国語教授の改良を求めんと欲す。〔中略〕音韻学説及び実行方法に至りては、則ち、二三年の歳月を経て、理論・実験の双方を以て並びに求むるにあらずんば、不可なり。〕

（馬裕藻「小学国語教授法商榷」『東方雑誌』九―九　一九一三：一六）

(24)於音韻之学。則未有知。〔「音韻之学」に於いては、則ち、未だ知ること有らず。〕

（陳衍「石遺室詩話続編巻十三」『東方雑誌』一四―二　一九一七：一二四）

(23)に見られる「音韻学説」は、これに続く「実行方法」が「実行の方法」であることなどから考えて、「音韻の学説」であろうか（「学説」は、章炳麟『文学総略』（『国故論衡』浙江図書館　一九一九：五九オ（一九一〇初刊））に、「或言学説文辞所由異者学説以啓人思文辞以増人感」〔或いは言う、学説・文辞の、由りて異なる所の者は、学説は以て人思を啓（ひら）き、文辞は以て人感を増すと。〕（『漢語大詞典』「学説」②「学術上自成系統的主張・理論。」〔学術上、自ずから系統を成す主張・理論。〕の初出例）と見えるが、佐藤亨『現代に生きる　幕末・明治初期　漢語辞典』（明治書院　二〇〇七：九八）によると、これは、日本語の「例より新しい」という）。

いずれにしても、「音韻学」が「音韻之学」から生まれた語だということはいえるであろう。

三　「音韻学」はどのような意味で使われてきたのか

これまで見てきたところからいえば、「音韻学」は、主に明治の

半ば過ぎに用いられるようになった語であり、その当時において、大きく、（ア）漢字音の研究、（イ）日本語の音の研究、（ウ）音声学（phonetics の訳語）、の三つの意味・用法があったといえる（以下、この節は、主に阿久津二〇一八によって述べる）。

右のうち、（イ）は、日本文典における、音韻や文字についての記述などに見られる。（ウ）は、先に挙げた上田万年のほか、伊沢修二の著作などに見られる。

Phonetics の訳語としては、この当時、「音韻学」のほかに、「発音学」や「声音学」なども使われていたが、一九二〇年代になって、「音声学」が多く用いられるようになり、やがて、「音声学」に収束する。

「音韻学」は、これに代わり、一九三〇年代にもたらされた、当時最新の言語音理論である、プラーグ学派の phonology の訳語として、「音韻論」とともに、使われるようになる（26・27）。ただし、これより前に、H・スウィートの phonology を金田一京助が「音韻学」と訳している（25）。

（25）言語の音の研究は、音韻学（若しくは音韻論）に属する。音変遷の歴史や原則のことも此の中の部門である。音研究の学問には今一つ音声学（或いは声音学）といふものがある。此の方は、音変遷の歴史や其の原則のことは属しない。其の代りに、吾々の発音器官から生ずる音声の分析や分類などを主としてやる。

（ヘンリ・スウィート、金田一京助訳『新言語学』一九一二：四一）

（26）各国の言語学者達は次第に、言語学にとつては音素の研究の方が従来の生理学的な発音機構や物理・聴音的な音価の研究よりは重要なことを覚るに至つたのである。かくして、音声学（Phonetik）と音韻学又は音韻論（Phonologie）との間には根本的な差別がある事を認識する事となつた。

（菊沢季生「音韻論の発達」『コトバ』四―七一九三四：二一）

（27）近年プラーグを中心とする一派の学者たちが Phonologie といふ名を附けて言語の音声を研究する一種の観方を主張している。彼等の謂ふ Phonologie に対立するものは所謂 Phonetik である。我が国で或人々は Phonologie に音韻学といふ訳語を与へ Phonetik に音声学といふ訳語を与へて居る。

（神保格「所謂音韻学と音声学」『藤岡博士功績記念言語学論文集』岩波書店　一九三五：三一七）

phonology（独 Phonologie）は、従来、歴史的・文献学的な言語音の研究であった。それが、一九三〇年ごろから、具体的・物理的（自然科学的）な音声研究である phonetics（独 Phonetik）に対する、抽象的・機能的な言語音研究を表す語として使われるようになった。

このように、「音韻学」には、新たに、（エ）音韻論（phonology

の訳語）という意味・用法が生まれたが、phonology の訳語は、やがて「音韻論」に統一され、「音韻学」の主な意味・用法は、再び元の（ア）に戻ることになる。

なお、中国語においても、「音韻学」は、一九三〇年代から、phonology の訳語としても使われるようになったが、一九五〇年代以降、phonology（あるいは phonemics）の訳語としては、「音位学」（「音位」は phoneme の訳語）が一般的になり、さらに、一九八〇年頃からは、「音位学」に代わり、「音系学」が多く使われるようになってきている。

四　「音韻学」の同義語にはどのようなものがあったのか

これまで、「音韻学」と（ほぼ）同様の概念を表してきた語として、「音韻」、「音韻之学」（「音韻の学」「音韻ノ学」）を取り上げ、また、「音韻学」と同様に、phonetics や phonology の訳語に使われたものとして、「発音学」、「声音学」、「音声学」（以上、phonetics の訳語）、「音韻論」（phonology の訳語）の名称を挙げたが、本節では、これら以外のものを見ていく。

現代中国の「漢語音韻学」の概論書に、次のようにある。

(28)音韻学又称「声韻学」、古時或称「韻学」或称「音学」。在我国、音韻研究的歴史雖然很悠久、但以「漢語音韻学」命名則是近代的事。一九一八年、銭玄同在北京大学講音韻之学、其講義還称「文字学・音篇」。後来才把音韻学作為一門総的概論性的学科来研究。〔「音韻学」は、また「声韻学」とも称する。古くは、「韻学」や「音学」とも称した。我が国においては、音韻研究の歴史は大変長いが、「漢語音韻学」と名づけられたのは近代のことである。一九一八年に、銭玄同が北京大学で「音韻之学」を講じたが、その講義は、まだ「文字学・音篇」であった。後になって、「音韻学」を、総合的な概論科目として研究するようになった。〕

（沈祥源・楊子儀・曹文安・馬寅生『実用漢語音韻学』山西教育出版社　一九九一：一）

右の記事の中には、「音韻学」、「音韻」、「音韻之学」のほかに、「声韻学」、「韻学」、「音学」という語が現れている。以下、この三語について、それぞれ、まず中国語における意味・用法を概観し、次いで日本語でどのように使われていたかを見ていきたい。

まず、「声韻学」については、『漢語大詞典』の「声韻学」に、「研究語音系統和語音演変的科学。是語言学的一個部門。又称音韻学。」〔言語音の系統と言語音の史的変遷とを研究する科学。言語学の一部門である。音韻学とも称する。〕とあるが、用例は挙げられていない。この「声韻学」に含まれる「声韻」は、古くから「音韻」の同義語として使われてきたようで、たとえば、《漢字音の知識》といった意味で使われているものに、次のような用例がある。

(29)汝南周顒善識声韻。〔（南朝・宋～斉の）汝南の周顒、善く

「声韻」を識る。」

（蕭子顕撰『南斉書』巻五二　列伝三三「陸厥伝」六世紀）

(30)及五六歳、便学為詩、九歳諳識声韻。〔（白居易）五、六歳に及んで、便ち詩を為すことを学び、九歳にして「声韻」を諳識す。〕

（劉昫撰『旧唐書』巻一六六　列伝一一六「白居易伝」九四五）

また、「声韻」を書名に含む研究書には、明代の王応電撰『声韻会通』（一五四〇）、清代の戴震撰『声韻考』（一七六六）などがある。

「声韻之学」という言い方は、一九一〇年代の文献に現れる。『東方雑誌』の記事から例を挙げておく（先に(6)の説明に挙げた、魯迅『中国小説史略　匯編』にも「声韻之学」が見える）。

(31)私人之研究音韻製作標音文字者。不下数百。其用力最久而最勤者。当推盧君戇章。盧君居厦門鼓浪嶼。孜孜於声韻之学者。殆三十余年。奔走南北。以考察方言。推広其標音字母。

〔私人の音韻を研究し標音文字を製作する者、数百を下らず。其の力を用ゐるに最も久しく最も勤むる者は、当に盧君戇章（盧戇章）を推すべし。盧君、厦門・鼓浪嶼に居し、「声韻之学」に孜孜たる者にして、殆ど三十余年、南北に奔走し、以て方言を考察し、其の標音字母を推広す。〕

（傖父「論国音字母」『東方雑誌』一三―五　一九一六：五）

「声韻学」については、張世禄『中国声韻学概要』（商務印書館一九二九）などに使われたものが早い時期のもののようである（今日では、「声韻学」は、台湾でよく使われる）。

日本では、「声韻学」という言い方はあまり使われなかったようで、『日本国語大』に「声韻学」は立項されていないが、「声韻ノ学」、「声韻の学」は、文献に現れている。

(32)今ノ唐人ニ出逢テ通事ノタメニ学ブ唐音ノ稽古ト手前ノ学問ノ受用ニ声韻ノ学ノタメニスル唐音ノ稽古トハ其稽古ノ仕様ノ趣向大ニ相違アルコトナリ

（原双桂『過庭紀談』巻一　㊀　一八三四刊）

（この「目録」には「声韻学」が使われている）

(33)六朝の文学は仏典の漢訳に由り、思想の上にも言語の上にも多大なる感化を受けた、其の又感化を受けたがために支那文典は従前に無き新生面を開き、又仏典の伝ふる声韻の学は、適（たまぐ）、当時発達の新詩に影響を来たし、終に四声音韻の法則を新たに立て、沈約の撰せし四声譜の如き良著述を出だすに至つた位であるから、其影響を当年の詩学に及ぼしたこと決して少なくない、

（磯辺弥一郎「国文に及ぼせる英語の感化」『文章世界』一―八　一九〇六：六）

(32)の「声韻ノ学」は、《漢字音の研究》の意味で使われ、(33)の「声韻の学」は、《漢字音の研究》というより、《古代インドの音韻研究》といった意味で使われている。

次に、「韻学」については、『漢語大詞典』の「韻学」に、「即音韻学。」〔すなわち音韻学。〕とあり、その用例として、沈括の『夢渓筆談』（一一世紀）「芸文二」の「自沈約増崇韻学、〔以下略〕」〔沈約より（後）増す韻学を崇ぶ。（以下略）〕が挙げられている。また、『伝統語言学辞典　第二版』の「韻学」には、「音韻学術語。即音韻学的簡称、通用於清代。」〔音韻学の術語。「音韻学」の略称で、清代に用いられた。〕とある。「韻学」は、「音韻学術語」としては、主に清代に使われた語のようであるが、明代にも、章黼撰『韻学集成』（一四六〇）、濮陽淶撰『韻学大成』（一六世紀）など、韻書の名称に使われている。清代には、毛奇齢撰『韻学要指』（一七世紀）、毛奇齢撰『韻学通指』（一七世紀）、莫友芝『韻学源流』（一九世紀）などの研究書の名称に「韻学」が使われている。

日本では、「韻学」は、江戸時代になってから用いられたようである。『日本国語大』の「韻学」には、「漢字の音韻について研究する学問。音韻学。」とあり、初出例として、梅園堂（都の錦）の『浮世草子・元禄太平記』（一七〇二）「七・今の学者を指折てみる」の「韻（イン）学は三雲新四郎〔義正〕、大田平右衛門」（尾崎紅葉・渡部乙羽校訂『校訂西鶴全集　下』（一八九四）では、「太田平左衛門」）が挙げられている。馬渕和夫は、「韻学」について、これよりも広い意味に解釈し、「日本に渡来した漢字音韻学と悉曇学（サンスクリットについての学問）の混淆した学問、としてよいと私は考えている。実は『韻学』という名称は江戸時代では漢字音韻学の意に使用しているのであるが、古来、右の二つの学問は混淆して研究、伝承されてきたので、両方をひっくるめた概念として使ってもよいと思う」（馬渕一九九三：一〇）と述べている。実際に、本居宣長などは、「韻学」の研究対象に「悉曇」を含めるべきだと考えていたようである（㉞）。

㉞凡ソ音韻ヲ学バム者。必悉曇ヲ知ラズバアルベカラズ。世ノ韻学者タ、漢字ノ韻書ニノミ執滞セル故ニ天下ノ音韻ノ大体ヲ知ラズ。

（本居宣長『漢字三音考』「天竺国ノ韻」一七八四序）

（「世ノ韻学者」以下は割り注）

ほかに、《漢字音の研究》の意味で使われている「韻学」の例を、漢文典（㉟）、日本文典（㊱）から挙げておく。

㉟唐韻〔唐音〕ハ韻学　呉韻〔呉音〕ハ浮屠氏〔仏教〕ノミ用ヰ、学士ノ慣用スル者ハ大抵漢音ナレトモ、

（岡三慶『開巻驚新作文用字明弁　一名漢文典』一八七七：一オ）

㊱此ノ〔和語の〕延言約言ハ、全ク韻学反切ノ法ニ同ジ、コレヲ巻首ニ置ケル五十音図ニ照サバ、オノヅカラ知ラルベシ、

（佐藤誠実『語学指南　四』一八七九：三五オ）

最後に、「音学」については、『漢語大詞典』の「音学」に、「音韻学的旧称。」〔音韻学の旧称。〕とあり、用例として、顧炎武の『音学五書』（一七世紀）「序」の「於是今音行而古音亡、為音学之一変。」

〔是において今音行われて古音亡ぶ、音学の一変と為す。〕が挙げられている。また、『伝統語言学辞典　第二版』の「音学」には、「音韻学的簡称、通用於清代。」〔音韻学の略称で、清代に用いられた。〕とある。「音学」は、主に清代に使われた語のようで、清代には、『音学五書』（一七世紀）のほかにも、江永『音学弁微』（一七五九）、江有誥『音学十書』（一九世紀）など、書名に「音学」を含む著作が多く見られる。

一方、日本では、「音学」はあまり使われなかったようであるが、『日本国語大』には「音学」が立項されていて、「①漢字音韻についての研究をする学問。韻学。　②『おんきょうがく（音響学）』に同じ。」とある。このうち、「音学」①には、例としては、榊原芳野編『文芸類纂』（一八七八）巻五の「此人〔晋卿〕かくの如く、音学に明にして、文選爾雅の音を学ひ」が挙げられている（同書には、「音韻」、「音韻の学」、「音韻学」も使われている。(19)参照）。江戸時代の文献には、これより古い例も見られる。

(37)梵ニ悉曇アリ、漢ニ音学叶韻〔古音に関する学説〕アリ、
（松下見林『本朝学原浪華鈔』三　一六九八序、一七一六刊）

(38)沙門神珙能ク知リ二音学ヲ一著ス二切韻図ヲ一載タリ二于顧野王カ玉篇ノ巻末ニ一
（寺島良安編『和漢三才図会』巻一五「切字」一七一二）

明治初年の英和辞典では、柴田昌吉・子安峻『附音挿図　英和字彙』（一八七三）において、「Phonetics, Phonics」と「Phonology」の訳語が、ともに「音学」となっているが、これはロブシャイドの『英華辞典』（一八六六～六九）によったのではないかと思われる（阿久津二〇一八：三九）。

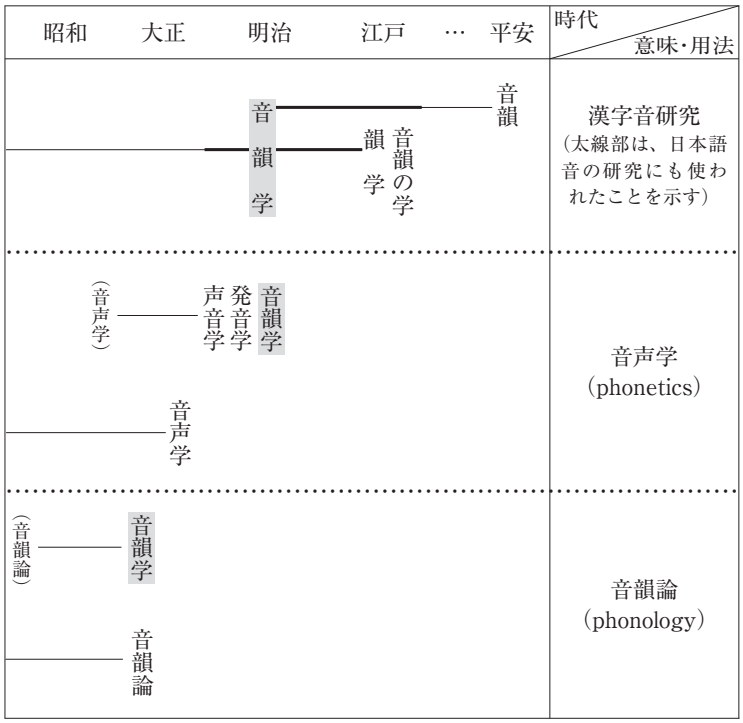
なお、『日本国語大』の「音学」②（「音響学」）には、用例は挙げられていないが、この意味の「音学」は、一八八〇年代以降の物理学の教科書などに使われている(39)。同じ《音響学》の意味の「音学」は、清代・洋務運動期に「中国社会の啓蒙を意図して刊行された月刊の定期刊行誌」（吉田二〇〇〇：一八八）である『中西聞見録』にも見える(40)。

(39)音学ハ、声音ノ発生・及ヒ其拡布ノ法則ヲ、講求スル所ノ学科ナリ、
（宇田川準一纂訳『改正物理小誌　中』一八八一：三六オ）

(40)音学乃考験各種之音、発音之理、伝音之拠也、〔「音学」は乃ち、各種の音、発音の理、伝音の拠を考験するなり。〕
（『中西聞見録』第二一号「論音学」一八七四：一〇オ）

五　おわりに

これまでのまとめとして、「音韻学」を中心に、日本における、音韻（言語の音）の研究を表す主な語の変遷を、図に示しておく。



図に見るように、「音韻」、「音韻の学」が「音韻学」になったわけであるが、これは単なる名称の変更ではないのかもしれない。日本語における「〇〇学」という言い方は、おそらく明治初年に西洋の学問を導入する際に作り出されたものだと思われるが、まさにその当時にあって、「西洋の知を理解・吸収し、翻訳や講義や著述を通じて公にする活動を続け」、「それまで日本にはなかった多くの言葉を造った」（山本二〇一六：八、一二）西周は、『百学連環』（一八七〇頃）「第一　総論」（甲本）で、次のように述べている。

(41)凡そ学問には学域と云ふありて、地理学は地理学の学域あり、政事〔学〕は政事〔学〕の学域あり、敢て其域を越えて種々混雑することなし。地理学は地理学の域、政事学は政事学の域、何れよりして何れ迄其学の域たることを分明識察して、其の境界を正しく区別するを要すへし。故に今政事学を以て専務と為す人に依りて、器械の事を以て問んと欲するとき、其人縦令器械の学を知ると雖も之を他に譲りて敢て教へさるを常とす。漢に於ても其学域と云ふ更に区別あることなし、最迂闊の事ならんか。

（西周述、永見裕筆『百学連環』「第一　総論」大久保利謙編『西周全集　第四巻』宗高書房　一九八一：一一）

（「漢に」以下は割り注。〔　〕内は全集による）

ここでは、西洋には、「何れよりして何れ迄其学の域たることを分明識察して、其の境界を正しく区別する」ような「学域」があるが、「漢」（や日本）には、そのような「学域」はないと述べている。この「漢に」以下に当たる部分は、別本（乙本）には、欄外に朱書きで、「漢学に経学家歴史家及ひ文章等の区別ありと雖とも更に学域たるもあらす」（『西周全集　第四巻』四二ページ）とある。西は、「中国伝来の学術分類」（「目録学」）については、「西洋の学術のよ

うに細かく専門に区別されてはいない」（山本二〇一六：七八）と考えていたようである。

西は、『百学連環』において、phonology を「音声学」と訳している（『西周全集　第四巻』九三ページ。これは、『日本国語大』で「音声学」（「{英} phonology の訳語」）の初出例となっている）。また、西の手書きのノート（左横書き）には、「phonology」の右に「音韻学」と書かれ、その「韻」が消されて、その下に「声」と記されている（『西周全集　第四巻』「百学連環覚書（第一冊）」三五五ページ）。ここから、西が phonology に対して、「音声学」のほかに、「音韻学」という訳語を考えていたことがうかがえる。実際には、phonology の訳語としては、「音声学」はほとんど使われず（「音声学」は、後に、phonetics の訳語として定着する）、後に「音韻学」や「音韻論」が当てられ、結局、「音韻論」で定着するのであるが（「音韻学」の用法は、《漢字音の研究》にほぼ限定される）、いずれにしても、「音韻学」という名称が生まれたことによって、「音韻」が「学域」をもつものになったということはいえるのではないかと思う。

参考文献

阿久津智（二〇一七）「『音韻』の語誌」『拓殖大学　語学研究』一三六　拓殖大学言語文化研究所

阿久津智（二〇一八）「『音韻論』と『音声学』の語誌」『立教大学日本語研究』二五　立教大学日本語研究会

井波陵一（二〇〇三）『知の座標：中国目録学』白帝社

釘貫亨（二〇〇七）『近世仮名遣い論の研究：五十音図と古代日本語音声の発見』名古屋大学出版会

坂出祥伸（二〇一八）『初学者のための　中国古典文献入門』筑摩書房（二〇〇八初刊）

馬渕和夫（一九九三）『五十音図の話』大修館書店

吉田寅（二〇〇〇）「洋務運動期の宣教師刊中国語定期刊行誌：『教会新報』・『中西聞見録』の一考察」『立正史学』八七　立正大学史学会

山本貴光（二〇一六）『「百学連環」を読む』三省堂

（あくつさとる　立教大学兼任講師、拓殖大学外国語学部教授）